

社会福祉法人 佑啓会



# 佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会  
〒290-02 市原市今富1110-1  
☎0436-36-7611  
発行者 里 見 吉 英  
編集者 三 股 金 利

## 生きものの考

古川 弘

たいと願う自分と外部から見た自分の違い。鏡をのぞき込むと、もう一

「ゴリラ、転落の幼児を救う」まことにショッキングな報道である。アメリカの某動物園で、おこった一瞬の惨事。五メートル下のゴリラの檻へ三才の男児が落ちたが、子連れの母親ゴリラさんが泣きさけぶその子供をすかさず抱っこして、飼育係の出入口へ運んでいく。他のゴリラ君達を制止して肅々と救出したわけである。たまたまテレビマンのチャンスだったのか、ビデオのワンショットが日本でも放映された。私は、昔見たフランス映画の幕切れの叙情を感じて、すこしおセンチな気分になってしまった。

その故でもないが、私の精神衛生上の清涼剤になるよう「生きもの」として愛を語りたい。

フランスの哲学者メルロ・ポンティさんが、申されたこと。事。「アヒルは、鏡に映った自分を自分の像とは認めず、知らん顔をするそうだ。犬は鏡に映った自分の像を見て、恐怖と忌避の反応を示し後ろを向いて逃げだしたという。幼児は知らん顔したり、逃げだしたりしないで、鏡の中の像を通して、はじめて自分自身の顧客になること。」以上は引用の一部だが、この文の趣意は、外国人がみた日本人顔と日本人自身の自己認識をくらべてみると対照的に違ふこと。結論は、こうあり

と、ここで、この水鳥の鳴き声、どこかで聞いたことがある。いや、もつと切実に「あゝ」そうだ。自宅の一人娘ならぬ愛猫「チビ」の音声そっくりである。猫の標準語は「ニャーン」というのが定説であるが、わが娘（いや年増か？）は少なくとも十種類の猫なで声を発している。もはや鳴きまねでなく猫語と私は一人合点している。すこし淑女ぶりを披露させていただけに、私が見る頃合いの時刻には、玄関先の上がり根に三つ指な

らぬ両手をすんなり床につけ、背筋をきちんと伸ばして着座して待ちわびている。「たゞいま、チビちゃん」と声かけすると、低い音声で「ニャーン」のひと言。私が廊下を進むと歩行を整えて寄り添い歩むというサービス振り。時として飛びはねて先走りして、振りむきざまに勘高い調子のニャーンと「のど」をならしている。私は一方的に「お帰りなさい。餌をちようだい。首をなでなでして」などと訴えていると解釈している。この恒例の業のおかげで、廊下を疾走して急ブレーキをかける爪あしが生き生きと彫刻されている。

女房殿もすっかりチビさんを気に入っている。会話不通はおかまなし。「チビちゃん」と問いかけると、腹を天井にむけて寝ころがり甘える。「しっぽしっぽ」の声かけには悠然と「尾」をふつて「しっぽ」の早口の掛声になる。長い尾を勢よく振りまわす自己表現ぶりである。我が二人一匹の家族は、なんととはなしに三人家族になつていく。しかし、猫族は猫さんで自分の姿勢をもっている。我々に望むことがない時はひとり孤独を楽しんでいる。この風情の時は、こちらが声をかけても一向に応答なし、やはり動物として一線を画しているらしい。でも、万物の長も猫族を嘲笑するわけにはいかない。「しやべり過ぎ、云い過ぎ、ひとりよがり、お世辞たらたら、いんげん無礼、へりくつ、云い放し、そしてうそ

つぱち・」など数知れない人間の身勝手さはまさに猫族の素気なさより始末に困ることもある。大体万物の長という独善さは、動物園の仕掛けにもみかけられる。學術的事業か、動物愛護か動物園設置の趣旨はともかく、私達人間族が檻まがいの特別パスで巡回観賞するといふサファリパーク。「人間って何を考えているの？」ライオン君の疑惑の眼差しがそこにある。かたや一般的な動物園、動物君を檻へ隔離、理由なき幽閉に「人間ってひどいよ……」という類人猿君の恨み顔がそこにある。この度のゴリラさんの善意に

なんとお礼したいのか！  
「生きもの考」などと思いがあつてみたが、ゴリラ君と鏡をのぞきあつても「人間万歳」とは云いきれない。しかし私には幸いなことが身近にある。知的障害をもつ諸君がそばにいてくれる。言葉や考えがままならないが、とにかくかけ引きなしにお互いにつき合つていこうという人間がそこにいる。そのおつきあいは、泣いたりわめいたりしたつて安らかなのが素晴らしい。大仰で感傷的なもの言ひようであるが、つまるところ生きることの素晴らしさに毎日めぐりあえるから……。

(佑啓会 理事長)



『いいなあ、  
こつこつ野郎気』  
高橋 由貴

私の第一印象はこうでした。思っていたより広く、きれいに整備された校庭やビニールハウス、ブワミの陶芸や花など、ほのぼのとしている空気が私はすこく気に入りました。そして私達吹奏楽部の演奏を熱心に聞いて下さったおばあさんや、リズムにのって体を動かし、手を叩いていた女の子の事がとてもうれしく思えました。

私は以前、聴覚障害者の方が集まる手話サークルに参加しました。そこで、聴覚障害者の方は障害者とは思えないほど生き生きとしていたのを今でも覚えています。今回もまた知的障害者の方と話す事ができなかつたものの、多くの人達とこうして近くふれあえる様な機会があつてすごく良かったと思つています。この納涼祭が、私にとって福祉に対する気持ちや行動力に積極的な力になりました。これから聴覚障害者の方と知り合う機会が増え、気軽に誰とでも話せたいなと思つています。今回納涼祭に参加する事ができてよかったです。いつかまた吹奏楽部としてでも参加する事ができればいいなと思つています。

八月四日に開催された納涼祭で姉崎高校の吹奏楽部のみなさんに演奏して頂きました。その時の感想を生徒さんに寄せて頂きました。

夏季帰省も半ばの土曜日。何時もの様に、カセットテープを買いお気に入りの店の食事の後、隣の薬局に飛び込みました。学舎に持って行く歯みがきチューブを買った。夏休みだからまだ帰らないよ」と言っても言葉だけでは理解できません。帰省したら土曜日にカイモノ、日曜にはにこやかに帰省出来るパターンが定着してききました。

入所のその日、先生方に押さえられ泣き叫ぶ息子を置いて逃げる様に帰ってきた夏の日から三年が経ちました。机をひっくり返し、筆筒を放り出し抵抗の限りを尽くしたという頃から考えると夢のようです。「この頃はどうかしようか」と先生にうかがうと、「すっかり目立たない存在になつてちよつとつまらない位」というお返事を頂いた時は本当に嬉しかったです。我慢する力も僅かながらついてきた様に思います。

息子は三十四年前の夏、市川の国府台病院で生まれました。二人の娘のあとに出来た長男です。姉達とは何かが違うかと思いつながらダウン症と診断される迄、一ヶ月半位しかかかりませんでした。その頃はまだ蒙古症Ⅱダウン症候群、という名は殆ど知られていない時代でしたが、国府台病院に其の權威がおられるという事で、週一回小児科外来は、ダウンのこども達であふれていました。いくつもの病院を巡つてやっと病名がわかったという人や、「蒙古症」を「脳故障」と聞き間違えたまま妙に納得していた人等、みんなよく似た容貌の子を持つ親達は、すぐ仲良くなりました。この病院にお世話になったお陰で「何で我が子だけが」という思いや、「やがて治る」という幻想を抱けなかつた反面、年上の患児達を見て、将来の限界の様なものを見てしまった事等が良くも悪くも子育ての原点になり、今の息子が出来上がったしまったのかなと思います。もともと悩み、あがき必死になつて馴れば良かったのかと、でもあとのまつり。とも

## 息子の三十四年

井村 美代



かく幼い時は病弱で、生命を守るのに精一杯でした。

それをすぎてやつと歩ける様になったのが三才半。幼児の通園施設に乳母車で通い始めた頃から「いたずら」の長い時代が続きます。宿題にいたずら書きされた姉はペソをかき、小犬は振り回されて尻尾を腫らし、何時も涙と笑いの提供者でした。

そしてむかえた学舎。近くの特学に入れるだけの能力はなく、船橋市の児童通園施設に三年半、その後地元の特学五年生に編入、養護学校中途から通所施設へと進路を捜し続ける旅でした。その間、色々な問題はあったものの、良き指導者と友達、親も良い仲間や助言者に出会えて幸せでした。そして彼も色々な経験をして年を重ねていきます。とても可愛がってくれた姉達は嫁ぎ、やがて次々とちび共が生まれ、父親の入院、手術等、言語理解は乏しくとも、体験した事は深く心に刻まれている様です。

通所施設に通う様になつてからの月日はまさに矢の様に過ぎました。徒歩二十分という恵まれたその園に通うのは大好きで、出席率は抜群だったと思います。一目散に家に帰りつくのが四時、それから親子で近所に買物に出かけるのが日課でした。それなのに何故入所を、と問われると困るのですが十年を経て園生の中では古狸となり、親も子もドブ

リとそのぬるま湯につかつてこのままでいいのかな、と思いついたのが数年前、家の中の力関係の逆転、妹の限界、父親の大病、私の持病、不安材料はだんだん増えました。でも決定的だったのは学舎を見学させて頂く機会があり里見施設長のお話をうかがって、こちらに託してみようかなと心が動かされたことです。自分でも意外な変化でした。親が元

氣な間は自宅からどこかに通わせるのが当たり前で一番良い事、何となくまわり中がそんな思いでいましたから。面接前夜に私が軽い発作を起こした事にも

後押しされて、是非にと入所をお願い致しました。本当に有り難い出会いでした。

三十才の坂を越えた頃から、息子は退行というのが老化的な、色々な事が下手になったり、出来なくなったり。そして親の老化も否応なしに進みます。障害の重い子を持つ親は「この子よりは先に死ねない。たとえ一日でも長く生きてやらねば」という思いにとらわれる事が多いのではないのでしょうか。頭では違ふとわかつてはいるのです。親が子より先に逝くのは当たり前、子供はその後豊かに生き天寿を全うして欲しいもの。でも・・・

「親亡きあと」という言葉の重さ、何時も心の片隅から離れないこの思いが、ふる里学舎に出会えて少し軽くなった気がします。親の生命と子供のそれは別のものですよね。

学舎を、終のすみか、と考える事は出来ないのかもしれない。でもここを離れなければならない時は彼にとつて一番良い進路を指示して頂ける。そう信じています。「夏休み」はまだ続くのだと納得した息子の部屋からは、ウルトラマンのテープと、それに合わせて一本しか残っていないウクレレを鳴らしながら歌っている大きな声が聞こえます。学舎も好き、家も好き、そして親も子もまあまあ元氣。こんな幸せな日々が一日も長く続く事を願うばかりです。



## 六百人がふいーばー

堀金 兼太郎

八月三日の納涼祭にむけて二日前より本格的な準備に入る。もちろん何ヶ月も前から事は始まっていたのだが、日が経つにつれ、お祭りムードが高まっていく。それと反比例して重たくなっていく私の気持ち・・・

今年の納涼祭は従来までの施設利用者を対象とするだけでなく、地域の方々との交流の場とする。こりやー大イベントだな、と半ば他人事の様に見える。それは、実行委員長は「お前」正々堂々。それからというものの、試行錯誤の連日。なにしろ元来が人々を喜ばせたり楽しませることができない性格で、何百人と来るであろう人々に満足してもらうなど、とても無理がある。一人ではう

子があかないから先輩や同僚に意見を求める。皆さんが真剣に悩んでくれる、と言うよりは見るに見かねて色々アドバイスをしてくれ。一つ一つの物が完成するのには多くの人の協力が必要であることを肌で感じる事ができた。と、余韻に浸っている間もなく残酷な程の速さで祭りの日を迎える。

祭りが始まってしまうと、意外と開き直れるもので、私の心配はごもっとも良い意味で裏切られていく。桃色ウサギも二頭のパンタも法被に身を包んだ職員も、そしてボランティアの方々も、全員が祭りに溶け込んでいて祭りを演出していた。そして、ブラスバンドの演奏も、歌手の歌声も、お囃子もこれも素晴らしい。来客された人々も釘付けになっていた。そして最後の餅投げで餅が飛び交う人混みの中で、押しのけられ突き飛ばされた時に初めてお客さんに満足していただけた事を実感した。

その夜、慰労会で協力して下さった皆さんにお礼をしてもらったところが、途中から私自身の頭の中が祭りの状態に陥ってしまった。できれば、気持ち良いまま終わりたいのに・・・

### 恒福集後記

春のそよ風の時期にスタートした新パンフレットの作成。佐藤第十八号・第十九号との並行作業の日々が続き、機舎が完成したら、是非ご覧下さい。秋風とともに佐藤第十九号をお届けします。

東瀬戸 徹